おかしの家

むかしむかし、あるどころに、テデとアバど居であったど。そのアバまだ、継母であったど。晩げに寝ででで、「太郎と花子どこ山さ投げて来るべし」って話しているとこを、太郎が目覚めて聞いてしまったど。花子どこ起こして知らせたら、花子まだシクシクシクシク泣いだど。したっけ、太郎、「泣ぐな、泣ぐな。いい考えあるから」って、こっそり外さ抜けて行って、ポケットさ、いーっぱい小石っこ拾って来たど。そしてまた、知らんねふりして寝ていたど。朝まに「太郎、花子起ぎれ。山さ、柿もぐに行ぐどぉ」てしゃべったど。ずーっと行ぐ途中に、曲がり角っこさ行ぐと、ポケットから石っこひとっつずつ出して置きながら、印っこにして行ったど。ずーっと奥山まで行って、テデとアバど、「んがんどぉ、ここに居れ。おら、今柿見つけてくるんてぇ」って、いねぐなったど。なんぼ待ぢでも来ねし、花子泣いたど。太郎まだ、「暗くならないうちに行ぐべし」て、花子の手引いて、行ぐ時印っこにしていった小石っこ頼りに、ずーっと戻ってきて、家さ着いたど。戸を開げだら、びっくりして、「なして戻ってきたばぁ」って、継母に気まがれだど。それでも「まんずまぁ、入れ、入れ」って家さ入れたど。そして、その晩まだ、夜中にテデどアバど相談しているのを、また太郎聞いたど。「今度、もっと奥さ連れで行って、投げてこねばねぇ」ってしゃべってあったど。朝まだ、「太郎、花子。山さ柿もぐに行ぐどぉ」って起こしたど。そしたら太郎、前の晩貰った煎餅っこ、食べないでおいで、ポケットさ隠しておいだど。行く途中、「あっ、カラスいだぁ」って、上を見でいるうちにそっと煎餅のかけら置いて、目印にしていったど。そして前よりもずっとずっと奥山まで行ったら、また、「おめんど、ここに居れぇ。おら今柿探して来るがらな」って、テデとアバとまたいねぐなったど。夕方まで待っても来ないし、「煎餅の印っこ、置いて来たから、それを頼りに戻るべし」って、花子の手を引いて戻ってみだところ、煎餅のかけら、鳩食べてしまって、なんもなくなってあったど。ずーっと歩いているうちに、暗くなったど。夢中で歩いているうちに、ずっと遠くの方に明がりっこ見えたど。その明がりっこ頼りに行ったら、大きな家があったど。入口もわからないし、屋根に上ったら、それがまだ、お菓子でできた家であったど。太郎も花子も腹減っ

てあったので、その屋根をペロッペロ、ペロッペロとなめったど。そしたら屋根さ、穴開いて、中さドーンって落ちてしまったど。中には婆さん居て、「どごから来たがぁ」って聞がれて、「道に迷って、明がりっこ見つけたために来たぁ」と言ったら、「まんずまんず、ままけぇ」って、まま食べさせてけだど。そして夜、太郎はなんだか心配で眠れなくて、こっそり起きてお婆さんの部屋をのぞいてみたら、大っきな口をあけた鬼婆であったど。そして「もっと太らかしてから食べるがぁ」と、独り言を言ってあったど。太郎、知らんねふりしてまた寝たど。

そして朝になったら、「花子、起きて水汲め」、そして太郎まだ、ちっちゃい窓っこついた部屋さ入れられて、そごから食べ物をやって、養ったったど。そして二、三日暮らしたら、「太郎、手っこのべてよこせぇ」って。太郎、今度前に鬼婆の独り言を聞いているために、棒っこのべてやったど。「まぁんだ太らねぇなぁ」って。婆さん独り言言って、まんだ食べ物入れてやったど。そしてまた、二、三日したら、「花子、花子、大っきい釜さ水、いっぱい入れて、湯沸かせぇ」。「太郎、まだ手のべてよごせぇ」って。その時も又、棒っこのべてやったど。「なんぼ養っても肥えねわらしだなぁ。こっちさ、出で来い」って言ったど。「花子、釜の湯沸いだがぁ。ぼんーぼんと沸かさねばだめだよ」って言ったど。花子は、「湯、沸いだか見るすべわからねぇ」って言ったら、その婆さん、大っきな口の鬼婆の顔になったったど。「こうやって見るもんだよ」って、釜の上にのび上がって、中をのぞこーうとしたら、足もとがズルンと滑って、煮えたぎった湯の中さ、頭がら落ちて死んでしまったど。そこで太郎と花子が命拾いして、二人で仲良く暮らしたど。とっちんぱらりのぴー。

岩山ヒサ（常盤・昭和16年生・57歳）

〈解説〉

「継子いじめ」の話である。継母が継子を殺そうとして山奥へ連れて行って置いてくるが、男の子の機転で帰ってくる。二度目に山奥に置いてきた時は、男の子の機転も働かず、山奥の一軒家に泊まる。そこは鬼婆の家で、釜ゆでにあうところであったが、女の子の機転で鬼婆を釜に落として助かる。男の子が山へ行く途中に小石やせんべいを落としていく機転は、「姥捨て山」物語で、捨てられる婆が途中に木の枝を折って行くのと同じ工夫であり、釜ゆでは他の継子いじめ物語にも見られる。

この話はグリム童話の「ヘンゼルとグレーテル」に似ている。読書で得た知識が入り込んだのかも知れないが、それが充分消化されて日本の昔話として違和感のない話になっている。童話には世界共通の要素があるのだろう。